

# 万象点描



農的社會デザイン研究所代表 蔦谷 栄一氏

## 競争重視より地域大事に

漂流必至の環太平洋連携協定(TPP)の行方とは切り離して、農業改革と農協改革が一体化して進められつつある。キーワードとして持ち出されたのが「農業所得の増大」で、その意図するところは競争原理のさらなる浸透と、市場化・自由化の徹底による日本農業の構造改革で、絞り込まれたプロ農家による大規模農業の展開にある。

こうした流れの一方で昨年4月には都市農業振興基本法が成立し、市街化区域内農地が「あり得べき農地」として位置付けられ、都市農業の振興とともに都市住民が市民農園などをはじめ、より農業に参画していく機会が増えることが期待される。近年、農山村を歩くと若者や子連れの夫婦を見掛ける機会が増え、田

## 農業形態が二極化

園回帰現象が本物となりつつあることも実感される。

このようにプロ農家に農地が集積し、農政がこれを加速させる流れがある一方で、自給的農家や市民農園などのアマチュア農家ともいえるべき層が増えるという二極化現象が進行しつつある。言ってみれば農業の産業化が進められる一方で、産業としての農業ではなく、生産から喜らしまでのなりわいとして、あるいは農業というよりは土や生命に触れることを楽しみとして農の世界にさまざまな形で参画する人が増えている。

今の農政は、構造改革によるプロ農業の育成・拡大方向に傾き過ぎ、こうしたアマチュア農業なり農の世界がほと

んど無視されている。それが実情である。プロ農家とアマチュア農家のすみ分けができつつあるが、日本ではアマチュア農業も含めた農の世界をあくまでベースとして、この中にプロ農家をも位置付けていくという構図が本来的な在り方であるように考える。

言い方を変えれば都市住民や消費者が日本農業に期待するのは、食料の安定供給であるとともに、農業の持つ多面的機能や公益性・公共性の発揮である。規模拡大しても農業先進国にははるかに及ばないわが国の場合、より低廉な価格であることが望ましいとされるほどに、食料の安定供給は輸入物にシフトせざるを得ない必然性を有する。政策支援によって辛うじて可能となる食料の安定供給は、農産物の輸入自由化時代にあっては消極的意義を持つにとまり、多面的機能や公益性・公共性がポイントだ。

すなわち地産地消や都市農村交流、さらには田園回帰を促進させる中で、アマチュア農家や都市住民も含めた多様な担い手によって多様な農業を展開していく地域農業を軸とする農の世界を土台にして、プロ農家もこの中で中核農家として活躍していくものである。ここではプロ農家が土地利用型の新大陸農業や高度施設型のオランダ農業を指すというよりも、消費者と一体となって地域性を生かした地域循環にこだわった付加価値づくりに励むところに活路は開かれることになる。

規模拡大、コスト低減による経済性重視一辺倒から脱し、広く国民が公益性・公共性を享受できる農業への変革こそがポイントだ。

共性の維持・発揮こそが積極的な意義を有する。